

第二十七回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

稲垣 良典 著

『トマス・アキナスの神学』（2013. 11. 25 創文社）

『トマス・アキナス 「^{エッセ}存在」の形而上学』（2013. 12. 25 春秋社）

稲垣 良典 九州大学名誉教授

いながき・りょうすけ 1928年（昭和3年）11月27日生まれ 86歳 佐賀県小城市出身。

哲学・法哲学

[学歴]昭和26年3月、東京大学文学部哲学科卒業、同年9月アメリカ・カトリック大学（ワシントンD. C）大学院、昭和28年10月、M. A取得、昭和30年6月Ph. D取得。昭和57年2月、文学博士（東京大学）。

[職歴]昭和26年4月、南山大学助手、講師、助教授を経て43年教授。昭和47年、九州大学文学部教授（哲学・哲学史第1講座）、平成4年4月、福岡女学院大学人文学部教授、平成7年4月、長崎純心大学人文学部教授・副学長、平成10年4月、同人間文化研究科長、24年3月、退職。この間、米国ミズーリ大学、キングズカレッジ、ドイツ国ボン大学等で客員教授、ハーバード大学、プリンストン高等研究所で研究員をつとめる。福岡県宗像市在住。

著書に『トマス・アキナス哲学の研究』（1970年 創文社）、『法的正義の理論』（1972年成文堂）、『習慣の哲学』（1981年 創文社）、『抽象と直観』（1990年 創文社）『トマス・アキナス倫理学の研究』（1997年 九州大学出版会）、『神学的言語の研究』（2000年 創文社）、『講義・経験主義と経験』（2008年 知泉書館）、『人格《ペルソナ》の哲学』（2009年 創文社）ほか多数。

『トマス・アキナス 神学大全』全45巻（共訳1977～2012年 創文社）の翻訳により、毎日出版文化賞(企画部門)受賞。

受賞のことは

此の度、思いがけなく和辻哲郎の名を冠する賞を戴けるとの知らせを受けたとき、ただちに私の心に甦ったのは、ほの暗い大学の講義室で静かに淡々とした口調で講義される先生の風貌であった。先生は確か私が入学した翌年の春に退官されたので、私が聴いたのは東京大学での最後の倫理学概論の講義であった。当時先生は大著『倫理学』を中巻まで上梓されており、講義はその内容を回顧的な話を交えつつ要約する形をとったため、高校時代、先生の瑞々しい魅力に富んだ著作の数多くに親しんではいたが、その思索の根源に触れる力のなかった私にはどこか物足りない感じが残った。私が先生の思索の強靱さ、実在そのものに迫る探求精神に触れたと感じたのは、私自身停年で大学を退官した数年後、ニューヨーク州立大学出版部刊行の『倫理学』英語訳の書評を The Review of Metaphysics 誌に依頼され

て、改めて原著全体を精読した時であった。

《選考委員評》

驚田 清一

全巻で四十五冊にもなるトマス・アクィナスの『神学大全』の翻訳事業が、法外な年月をかけてついに二〇一二年秋に完結した。はじめは高田三郎教授、そのあと山田晶教授らに継がれていったこの事業、その中盤からは稲垣良典教授がその責を担い、残り三分の一はついに独りで訳しきった。もしこの気が遠くなるような訳業の完成が稲垣教授によって担われることがなければ、この国のヨーロッパ中世哲学史へのまなざしは細りゆくばかりであったろう。その偉業が達成されたのち、休む間もなく執筆に当たられたのが、この浩瀚な二冊のトマス研究である。

哲学の一般読者を想定して書かれた『トマス・アクィナス 「存在」の形而上学』は、西洋哲学史を貫くもっとも伝統的な主題の一つ、「存在」の概念を論じている。「ある」ということの意味が、あくまで「与えられてある」（つまり、存らしめられてある、創造されてある）ことの意味を突きつめるなかで問われている。「存在」は、人がいまここで〈事実〉として確証しうるようなものではなく、「われわれにとって限りなく知られえない存在」について本来いわれるものであるとして、ときにあたりまえのように〈価値〉を排除する現代哲学の「存在」理解の貧しさを、そして傲慢を、教授は鋭く批判する。

おなじ視点は、研究書『トマス・アクィナスの神学』においてさらに深く貫かれ、知ることと善く生きること、つまりは神学者トマスと修道者トマスとを切り離してしまうと、「信仰が有する、理性を証明し、導くちから」にこそ光を当てようとしたトマスの神学は潰えてしまうことが、「創造」「敬神」「受肉」「秘跡」などの概念をめぐる議論の錯綜を丹念にときほぐしながら明らかにされる。

この二冊からわたしたちがあらためて深く思い至らねばならないことは、愛さないと見えないもの、認識できないものがあるという、西欧で引き継がれてきたもう一つの思想の系譜であろう。ややもすればカトリックの教会制度の硬直した思想的（スコラ的）表現として不当に遠ざけられてきもしたトマス哲学の、その「再発見」をつよく促す二つの労作である。

関根 清三

農作物と同じように、学術畑の作物も、年によって豊凶の差がある。今年は、哲学思想の畑に様々な豊かな実りがあった、豊作の年である。

まず稲垣良典氏の受賞作『トマス・アキナスの神学』『トマス・アキナス「存在」の形而上学』の二著が、著者多年の中世哲学研究の成果として結実したことを慶びたい。著者が主導して二〇一二年に完成したトマスの『神学大全』全四五巻の訳業を踏まえ、前者は特にその第三部「キリスト論」を哲学的に読み解く研究書であり、後者はその存在論の独自の地歩を一般読者にも分かり易い形で提示した好著である。前者は、『神学大全』を信者の特殊な信仰の書としてではなく、一般的に「人間として善く生きるための知的探求」の書として読む限りにおいて優れて哲学的であり、後者は事実的な存在と端的な存在を同一視する現代の存在論を査問する点において、その今日的意義は鮮やかである。来年米寿を迎えられる稲垣氏のトマス研究の、文字通り秋の豊かな実りを味わいたい。

同じく中世哲学を本拠としながら、旧新約聖書からアウグスティヌス、ニュッサのグレゴリウス等の古典と縦横に涉り合う、古希を迎える哲学者、宮本久雄氏の『出会いの他者性』も、初秋の陽に一際輝く御業績であった。自ら神のようになろうとする傲慢と、その傲慢によって他者を支配する暴力とは、現代では他者を抹殺する虚無的意志とそれを貫徹する全体主義的機構として具現する。そしてそれらは、アウシュヴィッツと FUKUSHIMA において典型的に現れたと、著者は喝破するのである。しかもその根源悪を超克する思想的地平を披こうとして、ヘレニズム～西欧哲学神学のオント・テオ・ロギア（存在＝神＝論）の系譜ではなく、ヘブライズムの生成および他者への自己開放を表わす「エヒエ」（私（＝神）は成るであろう）に着目し、エヒエロギアを提唱する。『他者の蘇り』に始まるこの七年間に五冊を数える氏の思索の道行きは、エヒエ的人格がどう愛智の炎として燃え上がるかを、様々な文献や実践の読み解きを通して活写し、本書に熟成した感慨を禁じえない。

また若い世代でも、パリ第一大学での博士論文を元に日本語で上梓された大西克智氏の『意志と自由』は、アウグスティヌスからデカルトに至る自由意志論の系譜を哲学史的かつ哲学的に明らかにし、断簡零墨に至るテキストの読み解きと研究史との批判的対決を試みた刮目すべき成果であったことも、明記しておきたい。

これら哲学畑の豊かな実りに接することで改めて我々は、「人間として善く生きるための知的探求」を自分は徹底して行っているだろうかという、根源的な問いに揺さぶられる。

黒住 真

稲垣良典氏の『トマス・アキナスの神学』『トマス・アキナス「存在」の形而上学』は、「近代」を振り返る事件 3.11 以後、2013 年末に刊行された神学・哲学の書である。両書は、背景として、1962 年頃からの氏による個々のトマス論、中世哲学をめぐる多くの研究が、また 1963 年より刊行され始め 2012 年に完刊したトマス『神学大全』日本語訳全 45 巻（約六割は氏のお仕事）がある。これら半世紀の「中世」把握がまさに上記二著へと結集した訳である。人々にとって両書とそこに担われた遺産とは、今後、トマス神学、中世哲学またその総体に向かう際、重要な手立てとなり続けるだろう。

これまで二十世紀日本の大抵の「哲学」は、西洋について、近代以後および古代・新プラトン主義までには向かって、トマスに纏まる中世的な構造に踏み込むことは余りなかった。西田幾多郎でさえ、アウグスティヌスを好むが、トマスはほとんど彼自身の視野から消えている。この古代・近現代はあるが「中世がない」あり方は、近代日本の多くの哲学者また人々が持つ一般的傾向でさえあった。

それは「宗教」の問題にも繋がる。哲学には、無視できないこととして、人の営みがいかに根底や超越などの限界面に関係するか無限や限界性の次元がある。この点、戦前日本の哲学は、西田幾多郎の「場所」や和辻哲郎の「空」のように仏教的場に位置づけあまり歴史を考えない傾向もある。近代的な「主体」を批判しても、中世により立ち現れた超越的・根源的な「神」と「ペルソナ」に多くは関係しなかった。

しかし西洋のキリスト教史をみると、神自体の側から人間を位置づけ、神に向かうと共にその反転・異端が、信仰のあり方として大事な課題として対グノーシス等により立ち現われる。アウグスティヌス、トマスなどの「神学」はそこからの結集と完成の立論のようである。その「中世」は、いわば信仰（神学）あつての理性的智慧（哲学）である。そこで哲学が消えて不要になる訳でも信仰が位置づかない訳でもまったくない。信（神学）と智（哲学）はどこまでも決疑論的に結び付く。稲垣氏が指摘するように「知解することを求める信仰」なのである（『神学』p. 188）。

「神学」は、日本では、神道や仏教においてもありそれは祭祀論に結集する。ただ、近代のキリスト教神学では、専ら聖書の論理のみに収斂したとせば無教会になるか歴史を追うにしてもアウグスティヌスまでといった傾向が大きかった。これに対して、戦前・昭和前期、人々をトマス、中世に向け、国家に収束しない教会・祭祀（典礼）を強調した稀なしかし重要な人材が岩下壮一、吉満義彦である。また和辻は、最初岩下から批判されたが、戦時中、吉満を講師として大学に受け入れた。戦後になると、岩下・吉満からの継承は、最初僅かだったがやがて展開し始める。高田三郎、山田晶など何人かの貴重な働きがあり、それを最も大きく身に担われたのが稲垣氏である。

「中世」は、「自然的秩序と超自然的秩序」といわれるように、秩序ある宇宙観のいわば完成形態の根本的生命として「神」を見出す。その信仰からの「啓示」「恩寵」「教理」等として「神学」が、またこれに向かう「智識」の運動として「哲学」が展開する。この両方の中味を具体的にはっきり示して下さったのが稲垣氏のお仕事である。氏の「神学」は、キリスト教一般に大きな示唆を与えるが、その霊性は仏教さらに神道にさえ宗派・宗門を超えて関与する。また氏の「哲学」は、今後 21 世紀の方向を示している。現在、人間が「存在」さえ解体し、エネルギーと金融の所有を勝敗のように求めるとき、「中世」は決して古いものではなく翻って新しい示唆を私たち自身に示す。

稲垣氏が、戦時中からの流れを継承しつつ、戦後、歴史を遡及して神学と哲学として示されたもの、両書の信と智との結び付きは、21 世紀の現在とても有難い重要な意味を私たちに与える。岩下・吉満二人はもちろん和辻氏も現在いたならその意味をととても喜んだだろう。